～IS～FINALFANTASY

King of Ctastrophe

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
～ＩＳ～ＦＩＮＡＬＦＡＮＴＡＳＹ

【Ｎコード】
Ｎ５４７４Ｙ

【作者名】
Ｋｉｎｇ　ｏｆ　Ｃｔａｓｔｒｏｐｈｅ

【あらすじ】
２つの学校、
一つは【ＩＳ学園】インフィニットストラトスを扱う最高科学をもった学園
一つは【帝学院】魔法を使い軍神と呼ばれる神を操る神使いを育てる学院
そして、９と９が９を迎える時、世界に異端者の根源、
【観察者】を解き放つ。

それは【アギト】待つ世界

人は、生まれる時代も場所も選べない
これは、そんな世界に生まれた「天神　聖」の
最後の物語である。

プロローグ（前書き）

初投稿です
まだ中学生で、更新速度が遅いですが
どうか、読んでください。

どうぞ。

プロローグ

プロローグ

「なあ更識、俺がここに入っていのか？」
『大丈夫よ』
「なんでそう言い切れるんだよ」
『生徒会長権限があるから』
「それ、もっとマシなのに使えよ」
『いいのいいの、さてついたよ』
「ここは？」
『、ＩＳ学園，ＩＳハンガーよ』
「はぁ！？」
連れてこられたのはＩＳが置かれているハンガーだった
『これに触ってみて』
「え？何で？」
『いいから』
「いいけど何もないと思うぞ？俺は男だし、魔法力も持っているの…に……動いた！？」
ＩＳ…インフィニットストラトス
女性にしか動かせず、帝学院の生徒のように体内に魔法力を持っている人は
ＩＳのコアが拒絶反応を起こし動かすことのできない。
「な、何で？」
『おめでとう』
「おかしい、俺は帝学院、四神，の（朱雀）だぞ？動くはずがない、その前に俺は男だ。」
『そう、あなたは常人の２倍の魔法力を持っていながら帝学院，総帥，に次ぐ，神使い，』

四神…帝学院総帥の直属の四人個人が２つ名を持つ（玄武（ゲンブ）、蒼龍（ソウリュウ）、白虎（ビャッコ）、朱雀（スザク））

四人は別の魔法クリスタルを体内に持っていて専用の‘軍神’を操る能力を持っている

『そして、世界で２番目に男性でＩＳを動かせることのできる人』

「はぁ？」

『さて、織斑先生？』

＞ああ、お前、今すぐＩＳ学園に入れ＜

『ちなみに言うと拒否権はないわよ？』

「えぇぇぇ～」

これから始まるのは１人の神使いの物語である。

プロローグ（後書き）

前書きにもあるように、更新は遅いかもしれません
どうぞよろしくお願いします。

部分設定、主人公紹介

設定

ＩＳ…インフィニットストラトス
女性にしか反応せず、帝学院の生徒は体内に
持つ‘魔法力’とＩＳのコアが拒絶反応を起こし
起動しない。

軍神…グンシン
帝学院の生徒のみが召喚でき、体内に持つ魔法力
がある者のみ制御できる。
種類は多彩で、四神ともなれば専用軍神をもてる。

主人公

天神　聖…アマガミ　ヒジリ
身長…１７３ｃｍ
体重…５３ｋｇ
視力
右…不明
左…２．０
右目の色が赤色
左目は黒　右目に眼帯を付けている
眼帯を外せばＩＳを一撃で破壊できる魔法力を持つ
眼帯は、その魔法力を抑えるために付けている。

四神…朱雀の称号を持つ
専用軍神…アルファディオス
ＦＦ零式のバハムート零式がベース

更識家とは面識があり、楯無とは幼馴染でもある簪(かんざし)とも仲がいい。

第一話　転入初日に喧嘩？（前書き）

早く出来たので、

では早速どうぞ

第一話　転入初日に喧嘩？

『皆さーん、席についてくださーい』
ゆっくり口調で言うのは一年四組担任の川口先生である
＜はーい＞
『なんと今日は転校生が来ています、入ってきてくださーい』
ガラガラ
「失礼します」
『はい、転校生の天神君です』
「天神（アマガミ）　聖（ヒジリ）です。皆より一つ年上だけど呼び捨てでも
　構いません。一年間よろしくお願いします」
＜お、男？＞
「はい、そうですが？」
＜＜＜キタ━（゜∀゜）━！＞＞＞
＜二人目の男子！＞
＜しかもうちのクラス！！＞
＜千冬様みたいなクール系の！！！＞
『はいはーい皆さん静かにしてください！
　天神君の席は更識さんの後ろね。』
「更識？」
『そう、そこの青い髪の生徒』
「簪（かんざし）ちゃんか、久しぶりだね」
「うん」
「姉さんとは仲良くなれた？」
「いいえ、仲良くなる気ない」
「そうか、まあいいか、これからよろしく」
「うん」
「（ずっと画面ばっか見ているな）」
『さて、今日のＳＨＲはクラス代表を決めます。自薦他薦構いませ

んよ』
＜はい、天神君を推薦します＞
＜＜＜私も＞＞＞
「はぁ、自分はやってもいい［ちょっとまって］　誰ですか？」
［私は、アフリカの代表候補生（カリア・サーチェスタ）よ］
「そうですか」
「で、なんですか？」
［全く男みたいな薄汚いやつがクラスの代表？
笑わさないでくれる？実力から言えば相応しいのは私か
更識さんのどちらか、そんな弱そうな「誰が弱いのかな」ッ！］
［え、あなたに決まっているでしょう］
「なら、俺と勝負してみる？特別ルールで、
君がＩＳ俺がＩＳ‘以外’で」
［は？あんたバカ？ＩＳに勝てるのはＩＳだけだよ？もしかして頭も
弱っちいんじゃない？］
「べつにＩＳ以外でＩＳに勝つ方法ならあるしね」
［わかった受けて経とうじゃない、その鼻へし折ってやる］
「どっちの鼻が折れるかな？」
『決まりましたね、試合は来週の月曜日、一組と同じ第四アリーナ
で』

休み時間

『どうするの？』
「普通に倒すか、苛めるか？」
『違う、勝てるの？』
「勝てるさ」
『でも彼女の実力は私より上だよ？』
「簪ちゃん」
『なに？』

「先に言っておくよ、
俺は

（朱雀）だ」

第一話　転入初日に喧嘩？（後書き）

ちゃんとできてるか心配です
そろそろ、軍神だしますよ。

次回　第二話　クラス代表決定戦
よろしくお願いします。

第二話　クラス代表決定戦（前書き）

戦闘模写がうまくできません
でも広い心で見てください。

第二話　クラス代表決定戦

『織斑先生』
「川口先生、なんですか？」
『一組が終わったら四組も使ってもいいですか？』
「ええ、構いませんよ」
ビー　試合終了　勝者、セシリア・オルコット
「あれ？今戦っているのって」
『そうです、一組に居る同じ男子の一夏君ですよ』
「そうなんですか、次自分ですよね？川口先生」
『そうですね頑張ってください』
『聖兄さん、』
「簪ちゃん大丈夫、俺はＩＳごときには負けないさ」

「さあ、始めようＩＳと軍神の戦いを」
彼は黒の服の上から赤のマントを付けた制服のような服を付けていた

『あれ？来たんだ、遅いから逃げたと思ったけど』
「そっちこそ逃げないんだな、」
『は？ＩＳがＩＳ以外に勝てないのにＩＳを使わないあなたから逃げるなんてありえないわよ』
「じゃあ、はじめよう　≪我、四神が一人、クリスタルよ呼び掛けに答えよ≫」
『な、何！？』
＜＜＜何あれ、龍？＞＞＞
一瞬の光の後、一本の光の柱から龍のような生き物が現れた
「聖なる光の王　アルファディオス」
それでは、試合開始！
『ッ―そんな化け物なんかに！』

「アルファディオス―メガフレア」
アルファディオスの前に一つの魔方陣が出てきた
そこから一条の光の線が伸びてきた
ドガァン
『キャアアア』
＜＜＜何が起こったの！？＞＞＞
≪ＳＥダメージ２１９　ＳＥ残量３５８　ダメージレベル高≫
『クッ、何？…え？…嘘（ＳＥが２００近く削られた！？）』
「アルファディオス―パラライズパルス」
今度は彼女のうえに魔方陣が出来た
すると、電撃が落ちＩＳが動かなくなった。
『な、何で！？』
「アルファディオス―セイントボム」
『キャアア』
＜＜＜まただ、光っただけで＞＞＞
≪ＳＥダメージ２８５　ＳＥ残量２３　ダメージレベル高≫
≪シールドエネルギー残量危険域到達≫
『何で！―全く攻撃が届かない』
「最後だ、アルファディオス―切り裂け！」
『キャア！―つ、掴まれた！？』
＜＜＜あんな大きいのに早い！？＞＞＞
ビー　試合終了　勝者、天神　聖
『……』
「？―ッアルファディオス助けろ！」
パスッ
「間に合った―川口先生！すぐに保健室へ」
［は、はい］

保健室
＜外傷はありません、気絶してるだけですよ＞

「良かった、なら大丈夫だろう。」
『何で、心配してたの？』
「何でってそりゃ怪我人を心配するのは当たり前だぞ？」
『でも喧嘩を売ってきたんだよ？』
「何を言ってるんだ簪ちゃん？敵でも人の命だよ？」
『……昔から聖兄さんは変わってない』
「そうかな、まあ、あまり変わりすぎても大変だろ」
『そうだね。先に帰ってる。』
「ああ、ＩＳ作り頑張れよ。」
『ありがとう』
パシュウ
「（意外とうるさいドアだな怪我人のこと考えてないな）」
『う～ん』
「気がついたかい？」
『ここは？』
「保健室だよ」
『保健室？』
「そう、戦ってあと気を失ったんだ。で、俺がここまで運んだってわけ」
『ッ―！』
「どうしたの？」
『あなた、何者？』
「ああ、気になるか。皆同じことを聞いてきたよ。さて、改めて自己紹介させてもらうよ俺は、

帝学院の四神が一人、≪朱雀≫だ。」

第二話　クラス代表決定戦（後書き）

ちょっと飛びすぎな2話でしたがどうでしたか？
次回も頑張りたいと思います。

第三話　鳳　鈴音（前書き）

今回、後半がちょっと笑いが入ってます。

第三話　鳳　鈴音

ＩＳ学園…自称天才発明家・篠ノ之束により開発されたＩＳ（インフィニットストラトス）その操縦者を育成する学園である。

校門の手前、
手描きの地図を持った小柄な少女がそこに居た。
『ふうん―ここがＩＳ学園かぁ…』
どうも来るのは初めてらしく、立ち止まったまま辺りを見回していた。
『って無駄に広いわねここ』
と、ボヤきながら地図を睨みつけると、
「あれ？鈴ちゃん？」
『ふぇ？…え～と、どちら様？』
鈴と呼ばれた女の子が首をかしげた。
「……俺だよ、聖だよ。小さい頃あんなに遊んだのに忘れたのか？」
ジっと彼女が聖を睨みつけた
『…聖！？ホントに聖なの！？あの頃はメガネかけてなかったのに…なんでアンタがここにいるのよ』
「何でって…ここの生徒だし」
「ここの？Ｉｓって女しか使えないじゃん」
「特例だよ。二人目のな」
「へぇ、一夏の次の…右目はどうしたの？病気？」
「あ、あぁ、これ？…カラコンだよ、片目だけど」
「…変なの。あのさ、聖、学園の先輩としてお聴きしたいことがあるのですが…」
「んだよ、妙に改まって気持ち悪ィな」
無意識に聖が身構えた。
そんなことはお構いなしに鈴は続ける。

「事務室どこか教えてくれない？」
…しばしの沈黙
「…何だ、それだけかよ、ついでだ俺も用があるし、ついてこいよ」
「なによ、何言われると思ったのよ。怪物じゃあるまいし」
「いや…ガキの頃のトラウマがな…そんで、お前何組だ？」
さらりと、鈴は答えた。

「私？確か４組だよ」

「中国代表候補生・鳳鈴音よ、よろしく」
「じゃあ、鳳さんは天神君の左隣の席ね」
川口先生が勧めた席に鈴が座った
「まさか聖と同じクラスだとはね…誰かの陰謀かしら」
「俺が聴きてぇわ…」
「そこ！静かに」
珍しく先生が怒鳴った。
「「はーい」」
「もうすぐクラスリーグマッチがあるのは知っていますね？クラス代表は天神君だけど、訳あって彼はＩＳ使えないので、副代表を決めたいと思います。希望者はいますか？」
その問いに代表候補性生同士のカリアと鈴が手を挙げた。
当たり前と言えば、当たり前である。
「他にいませんか？推薦でもかまいませんよ」
カリアが立ち上がって、
「副代表は私で十分です。やるだけ時間の無駄でしょう」
「何言ってんのよ、アンタそんな気持ちで副代表なれると思ってん

の？」
鈴も立ち上がってカリアと対峙した。
「いきなり転校してきてなんなの？まさか特別扱いきどり？」
「まさか。自信があるから立候補したに決まってるじゃないの」
「おい、鈴、やめろって」
「なによ聖、アンタはどっちの味方なのよ」
「いや…そういうわけじゃねーよ。ここで愚痴っても話にならねぇだろ」
「向こうの味方するってわけ！？幼馴染なのに裏切るってワケ！？」
「お前幼馴染をなんだと思ってんっだよ！」
「え？奴隷？」
「驚くほど見下された！？」
「あ、間違えた。メガネがのくせに右目カラコンしてる奴が私の奴隷だったんだ」
「俺じゃねェかよ！よく個人名出さないで表現したな！！」
「ホント？私小説家になれるかも」
「そんなこと言ってねぇぇぇぇぇ！！」
そんなやり取りを続ける二人。
完全に蚊帳の外に追い出されたモブキャラのカリアがブチギレた。
「誰がモブキャラよ！！」
だってもう出ｎａ…
失礼、口が滑りました。カリアがキレた。
「なんなのよもう…あぁ、もうそこ！！何勝手に進めてんのよ！話に混ぜなさいよ！」
「あ、すまんカリア。ついクセで。鈴、カリア。俺の意見はこうだ。ここでいがみ合っても仕方ないから直接戦って決めたらいいでしょ」
あんまり素っ気無い提案に慌てて川口先生が割って入る。
「ちょっと天神君！？勝手に決めないでくださいよ！！」
「なぜです？」
「どこで戦うつもりですか！」

「もちろん、アリーナですが？」
「使用許可出すの先生なんですよ！？代表決定戦もこの前やったばかりですよ！」
「じゃあ先生、アリーナ使用許可申請出せばいいんですよね？」
「そうですけど…あの…天神君？まさか…」
「よし…おーい！！楯無先輩！！」
窓に向かって聖が叫んだ。
そして、上からロープが垂れてきて、
「聖、呼んだ？」
＜＜＜＜楯無先輩！！！＞＞＞＞
クラス全員の女子（鈴、カリアを除く）が一斉に楯無に駆け寄る。
≪どうやって来たんですか～≫
≪お怪我はないですか？≫
≪ってか好きです！！付き合ってください！！≫
「…いつもあんな感じなのか？カリア？」
多少、というかかなりドン引きして聖が言った。
「…わたしに言わないでよ」
返す言葉もないようだ…モブキャラだから意味深なセリフ言わないと消えちゃうよ？
「ナレーターいい加減にしなさいよ！！なんなのよこの地の文！ホントに原稿に書いてあるわけ！？」
ええ、まあ、あなたモブキャｒａ…いえ、いじられキャラですから。
「作者ァァァァァ！！！」
「…何してんだ？カリア。そんな叫んで」
「なんでもないわ！」
「おおぅ、なんかゴメン…」
「ねえ…聖？用があるなら早くしてくれない？いい加減ロープに捕まるの辛いんだけど」
「あ…すいません楯無先輩、アリーナ使用許可証持ってます？」
「あるよ～、ほら」

「サンキュっす。それでは」
「ん、またね～」
＜＜＜＜先輩～行かないで下さい～＞＞＞＞
女生徒の願い虚しく楯無はロープを登って去っていった。
「さて、先生、これで大丈夫ですよね？」
「はぁ…わかりました。…では、明日の放課後、第３アリーナで試合を始めます。二人共、しっかり準備してくださいね」
ため息混じりで、ようやく川口先生が折れた。
「フフフ…ぜっっっったいに負けないわ…作者も…ナレーターも…」
おや？モブキャラが何か言っているようですが…
「もう名前ですら読んでくれないのね！いいわ！やってやるわよ！！」
「あの…カリアさん？大丈夫ですか？」
「大丈夫です…わたし、至って正常ですから」

第三話　鳳　鈴音（後書き）

はたして、モブキャラは生き残れるのか！？

「もう、モブキャラなんて言わせない」

次回も戦闘だぁ！

はぁ、戦闘摸写どうしよう

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5474y/

～IS～FINALFANTASY

2011年11月20日14時01分発行